
S ランクの適格者

マスだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sランクの適格者

【Nコード】

N5980N

【作者名】

マスだ

【あらすじ】

変わった特徴を持つ主人公にある日転機が訪れさまざまなことに巻き込まれるようなお話です

今はぜんぜん進んでません。

始まり（前書き）

趣味で書かせてもらう作品です一人でも読んでくださる方がいれば
ありがたいです

始まり

この世界は科学ではなく魔術、オカルトが発展した世界

ここは、大陸ヨーステスという大陸にあるあまり大きくない町だ

「ソルトそろそろいこうよ」彼女は俺と昔から遊んでいるいはよる幼馴染みのスール、商民の娘だ水色の髪にパツチリした目、美をつけても申し分のないかわいさだ。

「ああ悪い」そして俺ソルトは昔この町に捨てられていて、この後ろにいるおっさんに拾ってもらった捨て子だ、ちなみにこの名前は一緒に置いてあった紙に書いてあったらしい。

「じゃあ行ってくるな養父さん」

「おお、スールに変なことするなよ」そしてこの人がおっさんことジーズだ。

「へんなことってなんだよシバクぞ」

「おお怖い怖い」

「まあまあソルトちゃん」

なぜこいつは顔を赤くして照れているんだ、

「クク、相変わらずだな」うるさい、爛れるこの野郎

「この町の博物館にSランクの伝説級の魔具が来たんだからみてこいよ、そう滅多に見られないぞ」そう俺たちはこの町にきた伝説級の魔具を見に行くのだ。

「まあ、見に行くけどさ、いちいちからかうなよ」スールのおかげで一日早く見に行ける特別権利がもらえたのだ。

「まあ、若い男女をからかうのわ大人の特権なんだよ」ちいい、なんて良い性格してやがる。

くそっ「じゃあ行こうぜスール」

「うん、行ってきましたおじ様。」うーん、こんな奴に様付けるなんでもったいないな、でも何回そう言うふうに言ってもやめないんだ

よな。

そして15分ほどでこの町の名物となっている博物館が見えてきた
「いやあ、お前のお父さんが博物館を建設するのに一役かってラ
ツキーだったな」

「うん、わたしも貸切で見れるとは思わなかった」

「お前、大勢の人苦手だもんな」

「そう言う意味じゃないけど、、」

「ん、今なんて言った？」

「え、なんでもないなんでもないよ！」変な奴だな。たまにこうな
るんだよな。「少し鈍すぎるような気がする、、、長い付き合いな
のに。」

「ん、またなんか言った？」

「うーモウっ」なんだ、機嫌>きげん<が悪くなったぞ。

「う、まあまあ、せっかく貸切なんだしゆっくり見物しようぜ」
そう言いながら俺たちは博物館に入った。

始まり（後書き）

どうも作者です。もし少しでも読んでくださる方がいればありがたいです

Sランクの魔具

中は、スールの親父さんや誰かの自慢の品が飾られていた。

「いやあ、久々に来るとやっぱ驚くな」

「そうかなあ？」

「いや普通驚くだろ。驚かないのは同じ様な感じになってるお前の家にすんでるようなやつだけだとおもうぞ。」ここの品はちよくちよく変わるので久々に来ると前来た時とぜんぜんかわっているのだ。

「ふうん、まあこんなのよりさっさと本命見に行こうよ」

せっかちだなあ、ガークさんが、困っているのが目に浮かぶようだ。

と、こんなやり取りをしていたのだ。こうなるまでは、、、今俺は金髪の美人のお姉さんに地面に叩きつけられて拘束され、ほかの護衛と見られる人には剣を向けられていた。

「なんだおまえは、どうやって侵入した。」ばかなどうなってるんだ。しかもスールは保護されているみたいだし、、、

「侵入も何も普通に入ってきましたけど」そう言う

「ふざけるなよ。」そういつてリーダーっぽいお姉さんが半端ではない殺気を向けるとこう言った。

「わたしはドラゴン並の魔力を持った貴様のような魔物がここにいる理由を聞いたのだ」

はあ、なんだ、そういう事か、この人は俺をAランク並の魔物とく勘違い>してしまったのだ。

見るとスールもそう言うことかと納得しているみたいだった。よく見るとお姉さんも緊張して震えていた。おそらくSランク魔具の警備のために近づいた人がどれだけの力を持っているのか調べるための探査の魔術でも使っていたのだろう。

俺は魔力だけなら軽く<人間の域>どころか並みの人間の三倍の魔力を持つエルフですら超えているので仕方ないかもしれない。

「えーと、俺は人間ですよ？」

「はっ、冗談はよせ。今お前の正体を暴く魔法をかけたんだ、か、ら、なっ!？」

ああ、真実を知ったみたいだ。

「え、この魔力で人間だとっ!？」

「えっミレイ隊長マジですかこの魔力で!？」

まあ、信じがたいだろうけどな、一流魔術師ですら2000pくらいそれが、俺の魔力は、その数百倍なのだから。まあ今ミレイ隊長というらしいお姉さんが使ったのは、心眼の目という魔力の消費が激しい代わりに、絶対に幻術魔法を破る特別な魔法なので真実だと考えるしかないんだろうけどな。

それにしてもこんな魔法使える人いるんだなこれはGランクの特殊魔法なのに。

「えっと、本当ですソルトは、魔力が以上に多いんですよ、ここでやっとスールの助け舟が入った。

「そう言うわけなんで離してもらえますか。」

俺がこういうとまだ半信半疑といった様子でも一応離してくれた。

「ああ、すまない?、」まだ疑ってやがる。そう俺は何故かすさまじい魔力を持っている、だけど、おれは、<簡単な魔法ひとつ使えないのだ。>多分魔力が多くても逆に多すぎて使えないのだろう。

だから俺はこの町にある学校でも落ちこぼれといわれている。

まあ、スールは俺の逆で学年主席なんだけどな。

「まあ、間違いないなら誰にでもありますよ」ハプニングはあったが仕方ないだろう。

「じゃあスールSランクの魔具を見に行こうぜ」

「う「待ってくれ君に話がある」なんだまだ用事があるのか。

「何ですか?」

「私の名前はミレイ、眠りの鎧の管理者だ」眠りの鎧？聞いたことないな？

「何ですか眠りの鎧って？」スールも首をかしげている。物知りなスールですら知らないみたいだ。

「眠りの鎧とは君たちの見たがっているSランクの魔具の名前だ」ああ、Sランク魔具は鎧の形をしているのか。

「で、何でそんなこと言うんですか」スールが保護されているところを見るとスールの親父さんから来ることは、聞かされていたみたいだし。

「それはこれから説明しよう。眠りの鎧はSランクの魔具でありながら装備できるものが理論上存在しないのだ。」

「最強の魔具であるSランクの武器なのに装備できる人がいない？なんだおおきさをまちがえたということか、いやまさかな。」

「眠りの鎧は触っている者の魔力を大量に奪うのだししかも一般人なら一秒で死ぬほどの量を」

なるほどそういう事かそれなら凄腕のパラディンとかでも装備したら死ぬだろうな。

道理で理論上は装備できる者がいないわけだ。

「でどうして俺たちにそんなこと教えてくれるんですか？しかもそんな魔具使えないしなぜそんな魔具が」作られたんですかと聞こうとして

「最後まで聞け」といわれました。コエエお転婆なスールですら怖がってるぜ。

「眠りの鎧が作られたのは必要だったからだ」

「必要？」スールが聞いた。

まあ確かにそんな大量の魔力を必要とする魔具を作るなんてよほどの事があるんだろう

「センプレム、奴を倒すために必要だったのだ。」

「センプレム!？」スールが驚愕した。

俺も同じだが確かに納得したセンプレム太古にく7日で大陸を一つ

破壊した>悪竜だ大天使4人に倒されたが今もその話と傷跡は残っている。

あんなものを人が倒すならそれくらいの装備は必要だろう。

「そして、なぜそんなことを話したかだが」ここでいったん間を空けるとこう言った。

「君あの鎧の持ち主にならないか？」

「「「えっえー」」」

「何いつてるんですかミレイさん!？」

「そうですよ何考えているんですか!」

側近らしい人とスールに言われ、俺本人は頭がフリーズしていた。

「私はSランクの魔具、眠りの鎧の管理者そしてその任務はその適格者を探すことだ。あれだけの魔力を持つものくらいにしか使えないだろあの鎧は。」

「それはそうですけど」側近らしい男も言い返せないようだ。

いやまてこのままでは俺の立場がやばいことに、、、いや、どうせ役に立たない奴みたいに思われつつけるならそっちの方がいいのか、、、だったら。

「わかりましたやらせてみて下さい」

スールが俺を見て大きく目を見開いている。

「ではこちらに。」

ここから俺の人生は大きく変わる事になったのだろうと今になって思う、、、

Sランクの魔具（後書き）

今考えるとやっと魔法が出た気がします。

成立

ミレイさんに案内されると嚴重に強化魔法と封印魔法をかけられたガラスの中に漆黒とも暗黒とも言える闇色の鎧が飾られていた。

「これが、Sランクの魔具か。」

「そのとうりです、そしてこの鎧があなたを選べばあなたの物になります」

心のなかには、やってやろうじゃないかというのが4割、早まったかも3割、ここまできたら仕方ない2割、この後に期待1割くらいだ。ん、

「そういえばミレイさん口調変わってないですか？」

最初はもう少し乱暴だった気がする。

「ええ、むしろ今までの口調が違かったんです、護衛の隊長という役のほうが都合がよかったので。」

そう言うのと唐突に指を鳴らしその瞬間ガラスにかけられていた魔法が解除されていた。

これには俺もスール驚いた、普通、魔法はかけるのより解くほうがはるかに難しいんだけどミレイさんは魔具まで使って強化した2種類の魔法を一瞬で解いた。

流石にこれはスールにも出来ない事だ、いくらこの町で一番すごい魔術の使い手であるスールも井の中の蛙というのがはっきり言われたように感じた。

「さあこちらに。」

やった本人は普通のような顔をしていたけど。この人宮廷魔術師でも余裕で叩きのめせるんじゃないだろうか。

そんなことを考えながら、言われるがままに鎧に近づいていくと近づくとつれて妙な感覚があるような気がした。

まるで鎧の方からこっちに来るように手招きしているような。

「では、ソルト様でしたね。こちらの鎧に触ってみてくださいもし触って何の変化もなければすぐ手を離す変化があれば見守るという訳で。」

「分かった。」駄目でもとんだから気軽にチャレンジすればいい。

「ほんとにやるの？ 危ないよ。、、、」

とスールは不安げに言っているが、俺と一緒にのせいでスールにまで迷惑がかかったことがある。もし成功すればそんな事もなくなると考えれば安いものだ。

あれ？ そういえば。

「いまませんじゃなくて理論上いないと言ったてことは誰かこの鎧を装備できた人がいたのか？」

「ええ、文献によるといたみたいねその人が眠りの鎧で何をしたかまではかいてなかったけど。」

そういうながらミレイさんはこちらを驚いた様子でみた。

「そうですか。」

つまり装備出来たのがゼロじゃないということさえ分かれば良い。

「では、いきます」

そして鎧の真ん中辺りに手を置いた。

次の瞬間、鎧が液体のようになって手を伝って来た。

「ぐああっ」なんだこれいったい何なんだ！？

すごい勢いで俺の腕を伝ってきやがる！

そして闇色の液体が心臓の上辺りに来たその瞬間激しい痛み共に俺は意識を手放してしまった。

ああ？ なんだここあたり一面真っ暗じゃないか。

「なんだようやくお目覚めかい？」

と辺りを見渡した瞬間にいきなり言われ、こんなリアクションをしてしまったのを責めないで欲しい。

俺は声の主を殴り飛ばした。それも本気で。

声の主は簡単に吹っ飛び俺が何をやったか自覚したときにはすでに遅かったのだ。

「大丈夫か!？」

見ると俺が殴ってしまったのは12歳くらいの女の子だった。

色白で髪も目も黒い美少女と言ってもいい女の子だった。

そのことを自覚すると急いで駆け寄り自責の念に駆られながらそう言う彼女はこう言った。

「なんてひどい奴じゃ。これが我の次の主人候補主人とはの。」
今、こいつなんていった?

主人、まさか!

「お前この鎧の」

「そのとうりじゃ、我はこの鎧のなかにいる擬似人格じゃ」

いやまだすこししか言っていないんだが、まあやっぱりか、それにしても本当に人格がある魔具を見れるときがあるとはな。

高ランクの魔具は使いづらいから使い方を教えるために人格を付属させる時があるという話だけど、今はその魔具に人格をつけられる人がほとんど残っていないのだ。

「なぜ俺をこんな仮想空間に引きずり込んだ？」

「まあ、そう睨まないで欲しいの。」

そういつて嘯く眠りの鎧。

「ちっ、なんだ俺が気にいらなかったのか?」そう聞くと。

「まさか、我がこの鎧に宿っている事を知って欲しかっただけじゃよ。」

なるほどそれなら分らないことはない。長い間退屈だったろうしな。

「で、なんだ眠りの鎧ちゃん何のようだい?」

そう聞くと眠りの鎧の中に宿る人格は、頬を膨らませてそっぽを向くと言った。

「そんなふうなふうに眠りの鎧なんて変な名前と呼ぶなボケ、」

一気に機嫌が悪くなったみたいだ。まあ、確かに気にいらぬ名前だろうけどな。ふむ。

「じゃあスリープいやこれはないな、じゃあリープなんてどうだ。そういうと少し思案した後、気に入ったらしく」

「仕方ないの、我をそう呼ぶがいい」

微妙に顔が赤くなっているのには気づかれていないと思っているのだろうか？、

「じゃあリープ何のようだい？」

「特に用はない、我の新しい持ち主がどんな人物が気になったただけじゃ。お主の名前なんと言うんだ」

「俺は、ソルトだ。名字は分からないな捨てられてたもんで。」

「そうかではソルト」

「お主は、われでなにをするつもりだ？」

「は？どういう意味だ？」

「我と主従関係を結べば圧倒的な力を手に入れられる。お主はいろいろな意味で変わっているからの何のために使うのか聞いて、それに納得したらお主のものになっててもよい。」

「え、主従関係なんて結ぶの？魔具なの？」

「変わってるな、そんなの初めて聞いたぞ。」

「あたりまえじゃ、我は圧倒的な力を与える、そのために悪用されないためのシステムがあるのは当然じゃろう。」

「まあそんなもんか、魔力を吸うのは、そのためか？」

「違う、あれは持てるにたるだけの素質があるか調べるためじゃ、だが素質がある奴に限ってろくな奴はいなかったかの。」

「といってリープは遠い目をした。まあ、このリープを身に着けられるのはSランクの冒険者でも難しいだろうしそれだけの力があればいい性格はしてなさそうだしな力があれば他人を見下す奴も多いし。大変だったんだろうな。」

「そうか、でも俺は悪いけど何かしたいことがある訳じゃないできればいろいろなところにいけるだけの力が欲しかったただけだからな、

ごめん。」

軽はずみに手を出していいものではなかったと自覚する。そして謝ろうとしたその時。

「なんだ、それだけなのか？世界を自由に出来る力を手に入れる一歩前まで来ておきながら？あはははははははははは、面白い契約成立じゃ我がおぬしに力を与えてやる、好きに使うがよい」

と言い唐突にリープの姿がぼやけ始め俺は目を覚ました。

成立（後書き）

まだ、いまいち話が進展しないので出来るだけ早めに更新します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5980n/>

Sランクの適格者

2011年1月16日05時08分発行